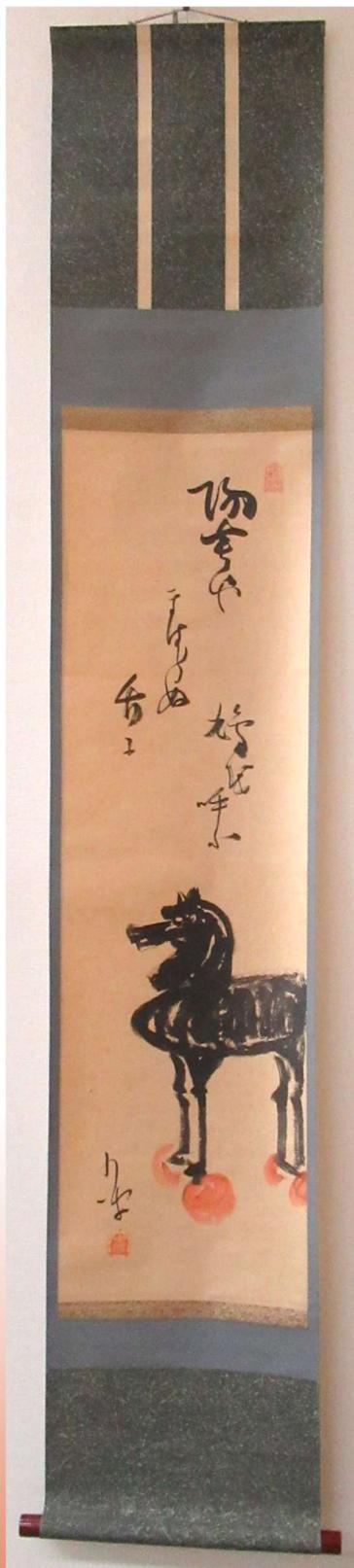


干支にまつわる掛軸

巖谷小波 「黒駒図」 (草津市蔵・中神コレクション)



今回は、令和 8 年が午年であることにちなみ、うまを描いた掛け軸を紹介します。巖谷小波(いわやさなみ) (1870-1933) が画と句をあらわした「黒駒図」です。

巖谷小波は、明治時代～大正時代に活躍した児童文学作家で、近代児童文学の先駆者です。明治 24 年 (1891) に児童雑誌『少年文学』第一編に掲載された処女作である児童文学『こがね丸』は、日本で最初の創作児童文学とされています。本名は季雄(すえお)で、筆名の小波は「近江」の枕詞にある「さざなみ」が由来であると伝わります。父は、貴族院議員で明治時代を代表する書家の巖谷一六(いちろく)です。一六は水口藩の藩医の生まれで、小波も出生地は東京ですが本籍は当初滋賀県にありました。また小波の妻・勇子の生家が甲賀郡水口(現・甲賀市)にあるなど、近江とのゆかりの深い人物です。

小波は自身が午年生まれであったため馬好きで、馬にまつわる書画や玩具を蒐集していました。大正 7 年 (1918) には、小波の集めた馬の玩具を展示するため自宅敷地内に「千里閣(せんりかく)」という建物を設け、無料で公開していました。

今回紹介する掛け軸は、絵と俳句をひとつの作品にした「俳画(はいが)」と呼ばれるものです。小波は、おとぎ話を題材にした作品をはじめ、多くの俳画をあらわしました。本作を見ると、朱色の車輪のついた黒い馬の玩具が描かれ、小波がしたためた句「陽春や まわらぬ舌に 鳩を呼ぶ」が添えられています。馬は日本で古くからさまざまな意味や願いを込めた玩具として親しまれていますが、特にここでは句にある「まわらぬ舌」という表現から小さな男の子の無邪気な様子が想起されます。描かれる馬の玩具は、小波のコレクションのひとつであったかもしれません。

(令和 8 年 1 月・草津宿本陣 川田 千絃)